

地方なまりの日本語と

日本なまりの英語

山 内 不二吉

「言葉は国の手形」という諺があるが、巧いことをいったものである。片田舎でそだったものでも、東京へ出てきて何年か都会生活をつづけているうちに、服装や態度だけでなく顔つきまでも次第に垢ぬけしてきて、自分では格別の努力はしなくても、見たところ東京生れのひととちつとも変りがないういようになれる。ところが、田舎で使っていた言葉のほうは、なかなかそう早くは垢ぬけしてはくれない。人しれぬ苦心をして東京弁を練習し、自分では田舎なまりはすっかり抜けたつもりでも、一度口をきくと、東京生れのひとには自分の同類でないことは案に見わけられる。まして、同じ地方出身のひとが聞けば、たとえ何郡何村のものともまではわからなくとも、同県人だぐらいのことはすぐに見当がつくものである。前に引用した諺に含まれたなまりの苦勞は、隠密が活躍した時代も現代も変りはない。

同じように日本語を話しているつもりなのに、地方出身者

の話す言葉がその国の手形になるのは、その音声の要素である発音・アクセント・音調などが地方によって違い、それぞれ異なった特徴をもっているからである。たとえば、東北地方のズーズー弁の特徴は、主としてその母音の発音様式にある。これを音声学的にいえば、母音の鼻音化があること、母音の調音位置がきわめて前寄りであること、無声子音が有声化する傾向の多いことなどである。関西弁の特徴は、母音の無音化がほとんどないこと、アクセントと音調が標準語と全然別の体系に属することなどである。また、九州弁の特徴は（もちろん各地一様ではないが）、拗音の「シェ」「クッ」やその他標準語に無い音があること、平板的なアクセント、尻上りの音調などである。東京出身者は、その言葉が一応標準的日本語とされているので、すいぶん得をしているわけである。しかし、いわゆる「東京弁」は東京の方言ともいうべきもので、必ずしも標準語そのものではない。東北地方に近いだけ

に、その母音の発音様式が東北弁の影響を多分に受けていることは、争えない事実であつて、西日本出身の人ならずぐに気がつくことである。(NHKの「歌の小母さん」二人の発音、とくに「イ」と「ウ」の母音を比べてみよう。)とくにその母音の「ウ」音は、前寄りで、口蓋化され、唇を平たくして発音されるので、「イ」音に近い。「シバヤ」の第二音節の「ブ」の母音はすなわちこれであつて、「シ」和「ヒ」を混同する傾向と相俟つて、これが「シバヤ」を「ヒビヤ」と聞き誤らせる原因となつてゐる。

ほかの地方のひとは、渋谷と日比谷を間違えることなど考えられないことである。東京弁の他の特徴としては、母音の間に挟まれたガ行音の鼻音化、母音の脱落と無声化(これについては後に説明する)などがある。このような特徴が、英語の音声を学ぶ際に非常にじやまになり、この点で他の地方(とくに中国、四国、九州)のひとよりよけいな苦労がある。言葉のことで地方出身者が東京出身者より、多少でも得をするのはこの点だけで、これこそ「江戸の仇を長崎で」であるといつたいところである。話が少々わきにそれたが、要するに、文字に書きあらわせば一言一句違わないほどであつてもその音声の点においては、地方出身者の日本語が標準語と同一の域にまで達することはなかなか難しい。したがつて、標準語の音声の研究と練習を重ね、とくに注意して話さないかぎり、どうしても地方なまりがあらわれることになる。同じようなことが、日本人の話す英語についてもいえる。

何十年も英語を熱心に勉強した結果、文章を書かすと英米人と交らないほど巧いひとでも、会話や朗読などのように、英語を音であらわす場合になると、日本人式英語の特徴をすぐにあらわすことが多い。それは、そのひとの英語の音声の研究が、英語の他の部門の研究に伴つていないため、その音声に非英語的な(すなわち日本語独特の)音声が大なり小なり残つてゐるからである。わたしがこの文の題の中に使つた「日本なまり」というのは、この英語の音声に混つてゐる日本語の音声および日本語的音声をさすのである。

もともと「なまり」(正確には「訛音」)は、「標準語と異なる地方的な発音」のことであつて、前に使つた「地方なまり」はすなわちこれである。いずれにせよ、地方なまりの問題は日本語の中でのことである。しかし、英語の日本語なまりは全然ことなつた言語体系に属する英語と日本語の問題であるから、その音声における差異は、日本語の中で標準語と方言の場合よりはるかに大である。したがつて、初心者の方カナ式英語や地方なまり式英語(すなわち、東北弁英語や関西弁英語のように、英語を聞けばその日本人の出身地がすぐわかるような英語)の場合には、日本語の音声が生のみあらわれてゐるのだから、「日本なまり」ともいえないほど英語との差異が大い。しかし英語が上達するにつれて、なまりの程度が軽くなる。つまり、はじめに英語の音声の代りに使つてゐた日本語の音声の色々な要素(発音・リズム・音調など)が、次第

に英語のそれに似てくる。もっとも、これらの要素には、日本人にとってやさしいものも難しいものもあるので、それが平均して良くなることは稀である。すなわち、「発音は悪いがリズムはわりに良い」とか、「発音は全体としては良いが、連続した子音の間に軽い母音が入る傾向がある」とかということが多い。英語を学ぶ者は、英語の音声に似てきた点をさらに似るようにすることはもちろん大切であるが、もっとも似ていない点(つまり、なまりのもっともひどい点)を知って、これに努力を集中しなければならぬ。

前にも述べたように、日本なまりは、英語と日本語の音声の差異によるのであるから、その差異とはいかなるものであるかを、まず知らなければならぬ。そのためには、最初に発音(狭い意味での発音、すなわち、英語を話す時に使う個々の音とその出し方)を研究すべきである。しかし、それをこゝで一々説明するには紙面に限りがあるし、それがこの文の目的でもないで、重要な点を後に二つ三つ述べることとし、まず根本的な差異を次に紹介する。

一 アクセントと音節の關係

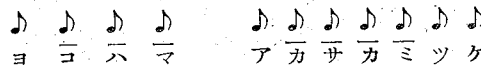
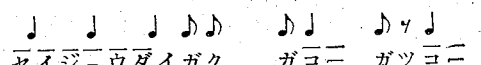
日本語のアクセントは高さのアクセントであるが、英語のアクセントは強さのアクセントである。日本語では、アクセントのある音節は、ない音節よりもピッチが高いが、強さと長さは他の音節とほとんど変わらない。これに反し、英語では

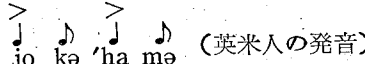
強く長く発音されるが、高さには直接な關係はなく、ときには強調される時に低くなることさえある。また、英語ではアクセントは発音と密接な關係があつて、アクセントのある音節の母音は、強くはつきりと綴字のあらわす本来の音に発音されるが、無い音節の母音は(例外はあるが)普通には弱いあまい音、すなわち[ə]や[i]や、またその中間の音など、どの母音ともつかない母音に変わる、この事實を知らないで、綴にしたがつて母音をみな忠実に発音し、アクセントのあるところだけを高くしたのは、日本なまりになつてしまふ。(「斗」[ト]と「斗」[ト]「すなわち」[小野]「発」[および]「dirig」[と]「dirig」[すなわち]、defer と differ を比較せよ。)

二 音節の長さ

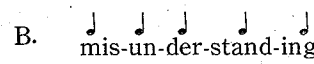
日本語では、多音節の語の各音節の長さがほとんど同一であつて、前にも述べたように、アクセントによつて長さが変わることはほとんど無い。そして、音節を構成するとは考えられない促音も、音楽の休止符のように、無音の音節として一音節の長さを持つ。また、長母音も二重母音も、短母音の約二倍、すなわち二音節の長さがあつて、長母音は大體同じ短母音を二つ続けたものと同じであると考えてよい。これらの事實は「横浜」、「赤坂見付」、「成城大学」などの語を発音し、また、「画工」と「学校」を比べてみれば、容易にわかることである。(図のI参照)

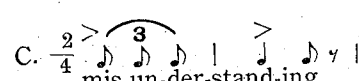
音節の長さ

I.  ヨ コ ハ マ ア カ サ カ ミ ツ ケ
 セイ ジョ ウ ダイ ガク ガ コ ニ ガ ツ コ ニ
 (画工) (学校)

>  jo ko 'ha me (英米人の発音)

II. A.  ミ ス テ ラ ン ダ ー ス タ ン デ ィ ン グ

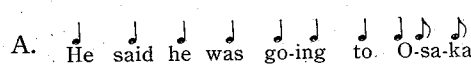
B.  mis-un-der-stand-ing

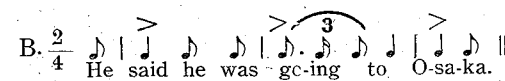
C.  $\frac{2}{4}$ mis-un-der-stand-ing

又は  ()

ex-am-i-na-tion

I'm glad to see you.

III. A.  He said he was go-ing to O-sa-ka.

B.  $\frac{2}{4}$ He said he was go-ing to O-sa-ka.

(コレヨリ短イ) (コレヨリ短イ)

ところが、英米人が「横浜」を発音したとする。英語式に、第一アクセントを第三音節に、第二アクセントを第一音節に置くので、第三音節がもっとも長くなり、第一音節がそれに次ぎ、第二と第四音節は第三音節の半分ぐらいの長さしかない。この音節の長さの不揃に、前に述べた強弱とあいまい母音の発音が加つて、日本語の英米なまり、すなわち、英語式な発音となる。(図のI参照)そして、これは、英語において、音節の長さが一定でなく、言い換えれば、母音の長さ

も、長母音・短母音・二重母音などの名と厳密な関係が無く、アクセントおよび次に述べる意味強弱とリズムによつて左右されることを示している。

今度は日本人が英語の *misunderstanding* という語を発音したとする。前に述べた日本語における音声の特徴があらわれて、(極く初心者の場合には、日本語のように子音の次にみな母音が付くから、カナ文字の数だけの音節ができて、次の図のIIのAのようになるが) 音節は五つとも長さがほとんど同一になり、アクセントのある第四

音節が最も高く発音される。これは図のBであるが、これではまだ日本なまりで、Cのようにならなければ英語らしく響かない。

三 リズム

英語では二音節以上の語には、どれかの音節にアクセントがあり、長い語の場合には、前に出た *misun-derstanding* のように、第一アクセントのほかに第二

アクセントが一つか二つあって、アクセントの数だけ強い拍子をもつ音楽的なリズムを作る。これと同様に、文の中にも、その意味をあらわすうえに大切な話、すなわち、普通には名詞・動詞・形容詞・副詞が、意味強勢 (sense stress) — 文強勢 (sentence-stress) とも言う) を受けて、音楽的なリズムを作る。この場合に、そんな語が多音節ならば、そのアクセントのある音節が中心となつて、意味強勢を受ける。また、単音節の語が主になつて成り立った文の場合には、その意味強勢は多音節の単語のアクセントと同じ関係になる。(examination と I'm glad to see you を比べて見よ。)

音節の強弱が音楽的なリズムを作るのは、アクセントや意味強勢を受けるいくつかの強い音節が、間にある弱い音節の数にかかわらず、音楽における小節の第一拍のように、時間的に殆んど同じ間隔を置いて起るからである。これは英米人が英語を読んだり話したりする場合に無意識に行うことである。このリズムが感じられない (すなわち、間にある音節の数によつて、強勢を受ける音節と音節の間隔が変わる) 不規則なリズムの話し方は、日本なまりの大きな特徴である。(図のⅢの He said he was going to Osaka. の A と B を比較せよ。)

四 音 調 (Intonation)

音調は言葉の音の高低によるメロディーである。すなわち、文中の語の音節がいろいろ違う音の高さで発音されるために

生ずる「ふし」である。まず日本語と英語の音調の根本的な違いを考えてみる。

日本語の場合は、前にも述べたように、そのアクセントが高さのアクセントであるために、音調はアクセントによる音の高低にしたがうのが普通である。つまり、音調はアクセントとほとんど一身同体であつて、ある語句が強調されても、それは、アクセントによる音程の差がはなはだしくなるだけである。したがつて、アクセントのある高い音節 (声が高く上る音節) が、音調によつて反対に低くなることはない。いくつかの語が結びついて一つのまとまつた意味をあらわす場合、たとえば、「ムギ」と「ハクゲ」が結びついて「ムギバタケ」となり、「メノ」(目の)と「マエニ」(前に)が「メノマエニ」となり、「ナク」(無く)と「ナル」(成る)が「ナクナル」となるのも、音調でなく、単にアクセントの変化だと考えられている。(日本語の音調の研究はまだ完成されていない) 英語では、そのアクセントが音の強いことをあらわすので、高さを問題とする音調には直接の関係はない。もつとも普通にはアクセントのある音節は幾分高く発音されるが、反対の場合もあるし、平らに発音される場合もある。しかし、音調は意味強勢と密接な関係があつて、前に述べた日本語の場合の「麦島」などのアクセントの変化に似た声の高低の変化は、英語では音調の一要素である意味強勢によるものとされている。そして、これによつて、an English teacher が「英

国人の先生」か「英語の先生」かを区別し、a black bird と a blackbird、a sleeping baby と a sleeping-car の sleeping の意味を（もちろん耳で聞くだけで）区別する。（ついでにいろいろ、このことを知っただけでも、視覚だけに頼った英文法の研究がいかにも不完全な、実用を離れたものであるかがわかる。）

音声の要素の中で、音調がもつとも日本語と英語に共通な点が多い。単語でも文でも、間に使うときには尻上りとなり、決定的な返事では語尾が非常に下る。持ちあげた物は、手を離せば重力によつて下に落ちる—すなわち不安定である。同じように、高めた声は、低くなることを相手に予想させる。

したがって、高く上げた声は間を意味し、下ろしきらない中調な声は、言葉が未完成で、後に何か言葉が続くことを相手に期限させ、あるいは何か言うべきことをわざと略している感じを与えるから、文中の切れ目にこの調子を使う。音調が全体的に、嬉しいときには上り、悲しいときには低くなる。こんなことは、音調が話すひとの感情をあらわすための音声的手段であるだけに、日・英に共通しているのが当然である。しかし、次に述べる発音の場合のように、共通点があったり似ている点があるもののほうが、全然違っているものよりも、実は習得しにくいものである。別なものならば新しく習わねばならないと思うが、似たものは手持ちのもので代用しようとする傾向が誰にもあるからである。この意味で、全体的には共通点や似た点があつても、こまかい点が日本語と

は非常に違う英語の音調は、英語の音声の諸要素の中でもっとも習得が困難であつて、他は極めえたひとでも、音声だけは日本人まりとして最後まで残ることが多い。もともと音調は各人各様であつて規準が立てにくい。同じひとが使つても、場合により感情そのものの條件に左右されてその都度変わるものである。また、これを習得するには参考書を読んでもほとんど役に立たず、もっぱら自分の耳に頼らなければならぬから、難しいのは当然だといわざるを得ない。これは日本語の場合も同様で、関西弁がなかなか抜けないのも、その特徴が主としてアクセントと音調にあるからである。

五 発音

英語に使われる音は、母音も子音も、日本語より数が多い。したがって、日本語に似た音はいうにおよばず、無い音も日本語の音で代用する傾向が多いので、日本なまりの大きな要因になる。紙数と印刷の都合で、こゝで日本語と英語の個々の音の差異を一々述べるわけにはいかないが、母音に関する根本的差異について簡単に付けくわえておく。

日本語では、母音の長短によつて語の意味が変る。たとえば、「ロバ」と「ローバ」（ろ馬と老婆）、「ノド」と「ノード」「ノード」（咽喉と濃度と能動）、「オバサン」と「オバーサン」（小母さんとお婆さん）などは、アクセントにもよるが、主として母音の長さによつて区別される。つまり、母音の長

短は意味と密接な関係がある。これは、長短の区別によつて、少い母音の数が二倍の数に使えることである。

英語にはそんな経済的用法はない。すなわち、意味の区別は長さによらない。いわゆる長母音と短母音の差異は、長さよりもむしろ音色にある。だから、たとえば *live* という語の母音を日本語の長母音のように長く延ばしても、やはり *live* を長く発音しただけのことであつて、決して *leave* にはならぬし *gate* をいくら短かく発音しても *get* にはならぬし、*leave* や *get* のように聞えたとすれば、もとの発音が誤つてゐるのであつて、すなわち日本なまりである。そんな（母音の長短による意味の区別）方法は、たとえときたま会話の場合にごまかせることがあつても、歌で声を長く延ばす場合などには、はっきりボロがでる。和製ジャズ歌手の歌を聞けばすぐわかることである。

子音の発音様式の差異も意外に大きい。とくに *m* や *d* などの破裂音は、やさしいようであるが実際は日本人には非常に難しく、語尾に来た場合には次に、また子音が連続している場合には間に、母音がはいる傾向があるので、一層厄介である。英語の破裂音と日本語の促音の関係など、色々述べたいことはあるが、別の機会にゆずることとする。

要するに、英語の発音を習得するうえに大切なことは、母音でも子音でも、舌の正しい使い方を知ることと、その練習を積むことである。口の開きも重要ではあるが、発声器官の

中で舌がもっとも重要な役目をもっていることは、巻たばこや鉛筆を口にくわえながら話しても、また腹話術で唇をほとんど動かさなくても、楽にわかる発音ができることでもわかる。舌の正しい使い方を知れば、発音に関する日本なまりも日本語の地方なまりも、大部分解消する。舌の動きが活潑で大きいことが、英語の発音様式の最大特徴である。

発音に関する日本なまりは、相当の大家（たとえばラジオの英語講座に出るひと）にも色々あるが、その中から二つだけ採りあげて次に述べることにする。

その一つは、日本語の撥音「ん」と英語の *n* の音を同一視することによる誤である。「ん」という字は一つの音しか表さないと思はれる。しかし、実際には、「ん」は *[n]* *[ŋ]* *[m]* *[p]* を加える人もある」という四つの異つた音をあらわし、日本人はそれを自覚しないで、自由に使い分けてゐるのである。試みに、「カンダ」「カンソウ」「カンガイ」「カンパイ」をゆっくり発音し、その中の「ん」の（音色よりもむしろ唇や舌の動きの差異を比べてみると、四つとも違うことが感じられる筈である。（その音色ももちろんみな違ふのであるが、最初は区別が難しいかもしれない。それは区別する習慣も必要ないからであつて、それが無いという事実が英語の場合と違ふところである。）日本語の「ん」は、*[ntd]* の前では英語の *n* にもっとも近い音であり、*[k]* *[g]* の前では軽い *[ŋ]* の音、*[m]* *[p]* の前では *[m]* に、その他

の音の前では英語に無い(すなわち、舌の先が歯ぐきか歯裏に付かないために、呼吸が鼻と口の両方から出る) [ɒ] の音に、語尾では [ɒ] か [ɪ] になる。

英語にもこれに似た *n* の同化作用が起る例があるにはあるが、原則として *n* という字は、[n] だけをあらわし、[k] の前で、語源やアクセントの関係によつて [ŋ] に変ることがあるだけである。だから、この差異を知らなくするために、*n* を日本語式で発音すると、once, inside, unhappy, invention などの *n* は英語に無い [ɒ] の音になり、unmarked, unpleasant, unbalanced など *un* の *n* は [m] になり increase, incomplete, ungrateful などの *n* は [ŋ] になつてしまふ。この種の誤は

単語だけに限られてはしなく、in sight, in peace, in case などの成句や、run, wild, One must..., None can..., done by などの語の組合わせにもあるし、また、M. P. 対 N. P., impatient 対 in-patient, import 対 in-port, imperil 対 in-peril など区別が付かなくともなる。この *n* に関する誤は非常に一般的であつて、日本生れの英語教師でこの誤を冒さないひとを、まだ数人しかわたしは知つてしなく。

もう一つの誤は、前に東京弁のところで述べた母音の無声化である。これは、(関西弁では)「ないが」「菊」のキ、「茎」のク、「鼻」のシ、「心」のシはじめの *n* などの音節の母音のような

発音の仕方をいうのである。この場合に、母音を出す唇の形や舌の位置は普通のまゝでも、さうやく場合に似て、息だけで声が出ない。すなわち、声帯の振動を伴わないのである。

この「母音の無声化」は、日本語では自然な発音でその例もきわめて多いが、英語では無声化は子音だけにあり、母音にはない。あるように思えるのは、注意して聴けばわかるが、無声化ではなくて脱落(すなわち、母音を発する唇や舌の構えの起らないもの)であり、日本語の場合でいえば、「ウツクシイ」の「ツ」の母音のようではなくて、「アタタカイ」が「アツカイ」となる現象(すなわち、「タ」の母音の脱落)である。だからたとえば、capital, beautiful, classical など *i* を、「[ʌ]」の *i* になつて、「キャタリ」の *i* のように無声化した母音で発音すると、これも日本なまりとなる。英語に限らず、ほかの外国語でも、日本語に採り入れられると、この無声化が起ることが多し。たとえば「リッチャー」の「リ」、「オルケスタ・ティピカ」の「ティピ」、「プッチーニ」の「プ」、「クカラチャ」の「ク」などはそれである。このように日本語として発音する場合は無声化するものゝが、英語その他の外国語にそれを応用するのは、もちろん日本なまりである。

なお、英語では、母音の脱落の例はきわめて多いが、無声化と混同されやすいのは、participle の初めの *i* の音、university の二つ目の *i* の音などで、その例は少い。また必ず母音が省かれるわけではなく、省いた発音も聞かれるという

だけのことである。しかし、母音を省くことと無声化するとは違ふから、注意しなければならぬ。

以上で英語の日本なまりの説明を終る。

さて、無いようでも有るもの、抜けたようでも抜けていないもの——それが地方なまりであるが、英語の日本なまりもまったく同様である。どちらのなまりも、抜くことは不可能ではないが、非常に難しい。しかし、まず自分になまりがあることに気がつかないのでは、努力も進歩も始まらない。わたしが英語の日本なまりの説明をしたのはそのためである。今までそれに気付かず、誤を繰り返して来たことに、わたしの説明がいくらかでも役にたつとすれば、何より嬉しいことである。

東京生れのひとには、地方なまりの苦労の察しがつかない。また、英米人や二世の英語教師には、日本人の教師や生徒の文法の誤や日本なまりの苦労の察しがつかない。(だから教師として必ずしも適当ではない——などの議論は別とするが)それは、体験がないので苦しみがわからないからである。とにかく、ひと通りの苦労では、なまりは抜けない。そこで、なまりを自覚しながらも、あまりにも難しいのであきらめるひとが多い。地方なまりの場合はそれでもかまわぬ。どうせ日本語のなかでの音声の差異の問題だからである。ラジオのアナウンサーや小学校の国語の先生になろうとする場合は別であるが、しいてなまりを直す必要がないから、あきらめて

もいいし、「東京弁の発音はきらいだ」といばついてもかまわぬ。しかし、日本人が学ぶ英語の場合にも、そんな態度をとつていかまわぬものだろうか。わたしがこの拙文で強調したいのは、このことである。

英語は趣味で勉強しているだけだとか、商売に必要だからやっているのだとかいうひとなら、日本語式発音でも間にあうかもしれない。しかし、日本語式でない正しい英語を教える責任のある学校の教師は、「専門は文学だから、難しい英語の発音はどうでもよい」とか、「どうせ日本人だから、自分の英語に日本なまりがあるのは当然だ」といつて平然としているわけにはいかない。それでは、和製の漢文を教えているだけなのに、中国語の教師だと自称するようなものだからである。専門がいわゆる「受験英語」であろうと、英文学であろうと、英語の教師は日本語ではない英語を教えなければならぬ。前にも述べた種々の日本なまりをもっているのはもちろんのこと、英語の個々の子音(たとえば *th* や *r* など)さえ発音できない教師は数多い。*th* や *r* は、定冠詞や *flower* や *pencil* などのやさしい単語に含まれていて、中学一年の読本に最初から出てくるのである。それが正しく発音できないというのでは、どの程度の学校で教えるにせよ、甚だ頼りない先生だといわざるをえない。先生が *th* を *s* で、*r* を日本語のラ行の子音で代用して教えているとすれば、生徒が正しい発音を習得できる筈がないし書取にも困る。また正しい発音

をほかのひとから聞いたときに、think-to sink, read-to lead, mirror-to miler など区別できる筈がない。それでは生徒が可哀そうであるし、先生も無責任だといわねばなるまい。

言語の本来の姿は「はなしことば」であって、文字に書いた言葉は死んでいる。これを音声にあらわしてこそ、その言葉は生きかえってくるのである。英文学を鑑賞するにしても、英語学の基礎が必要である。たとえば小説を読む場合に、登場する人物の言葉を読んで、それが直接話法であらわしてある場合はもちろんのこと、間接話法や描出話法の場合でも、あだかも自分が現にその人物が話すのを耳にしたように、(頭の中で、あるいは実際に声を出して) 正しい音声の生きた言葉に再現できるほどの語学力(音声学の知識と会話能力を含む)がなければ、その小説の真の鑑賞はできない——とわたしはいいた。

近年わが国で spoken English と、それに密接な関係を有する音声学の研究が非常に盛んになってきた。英語を話す外国人、とくにアメリカ人に接する機会が戦前よりはるかに多し、Far East Network の(アメリカ人の七割が使うといわれる) General American の発音が主として聞かれる(英語放送も随時聴くことができる。また、語学レコードやテープ・レコーダーという便利な物もできている。英語の音声の研究する手段と方法は沢山あるわけである。あとは意志と努力さえあれば、日本なまりは征服できる筈であるし、日本語の地方なまりも、(抜く必要があれば)同じ要領の研究で退治できないも

のでもある。

最後に付けくわえるが、日本なまりのあるひとは、イギリズ英語とアメリカ英語の音声の区別や功罪などをやかましく論ずる資格はない。日本語式でない英語が話せることが先決問題であって、日本なまりが残っているのに英語のなまり(英語の音声の地方差)を論ずることは、何といっても早すぎ

る。
(以上は、わたしがラジオで米軍放送、英語放送、英語講座、和製ジャズ・シンガーの英語の歌などを聴くたびに感じることをまとめたものである。)

受 贈 誌 (承前)

論究日本文学(第二輯)

文学部論叢(第一、第二号)

日本文芸研究(第四卷二、三、四号)
第五卷二、三、四号
第六卷一号

人文論究(第五卷一、二、三号)

紀 要 (一)

語 文 (第十三輯)

国 文 (第三号)

ピブリア (第三号)

アカデミア (文学篇Ⅳ)

国文学研究 (第九・第十輯)

立命館大学日本文学会

立正大学文学部

関西学院大学
日本文学会

関西学院大学文学会

清泉女子大学

大阪大学国文学研究室

お茶の水女子大学
国語国文学会

天 理 図 書 館

南山大学・南山学会

早稲田大学国文学会